

## アクターネットワーク理論を活用した 観光研究に向けての準備的考察 —— 概念的明瞭化と方法論の検討 ——

原 一 樹

### 〈Summary〉

This paper aims to clarify how to apply Actor-Network Theory (ANT) to tourism studies. In doing so, it predominantly addresses the ANT theories of Bruno Latour and John Law. Referring to ANT and previous tourism research, this paper clarifies the fundamental concepts of ANT. Further, it clarifies the possibilities of future research subjects and methods based on the global trend of sustainable tourism and various new types of tourism phenomena during the COVID-19 pandemic. Specifically, in the first half of this paper, the fundamental concepts of “heterogeneity” and “relationality” are reconsidered from the perspective of tourism studies. Then, the ontological implications of applying ANT to tourism studies (“the plurality of realities”), the resulting position of researchers (“the political nature of researchers”), and the four fundamental characteristics of ANT as a research method are considered. In the second half of this paper, referring to concepts proposed by previous studies such as “plurality of realities of things,” “tourism scape,” “passage,” and “relational entrepreneurship,” possible future research subjects and methods are clarified in three categories. These categories are “thing,” “destination,” and “innovation.”

### はじめに

アクターネットワーク・セオリー（以下 ANT）は、1980年代以降、科学技術社会論や科学に関する人類学の文脈で登場した理論で、代表的論者として B・ラトゥール（Bruno Latour）や J・ロー（John Law）などが挙げられる。現象を構成する様々なアクターの動きを詳細に記述することを目指す ANT は、経営学などの他の学術領域に応用されてきた。観光研究の文脈では、ANT はそれまでの観光研究において支配的であった二項対立的図式（ホスト／ゲスト、日常／非日常等の二項対立）、或いは「構造主義的議論」を乗り越えるものと諸論者により認識されている。例えば Jóhannesson（2005: 133）は、ANT は、1）社会世界の関係的物質性を捉えようとする、2）多様な関係の秩序化を捉えようとする、の 2 点において重要だと述べている。或いは Simoni（2012: 72）は、ANT は「事物が何を為すかに関するより良き理解」や、「事物が異なる実在性を現実化するやり方に関するより良き理解」を与えるものだと評価している。ANT は一

般概念を用いて現象を「説明」するのではなく、現象がいかにより様々なアクターの行為や関係性によって形成されているかを「記述」することに理論的貢献の主眼を置く点の特徴とする。これは、我々の前にある「秩序」がアクターの関係性の「結果」として、いかに「生成」するかを捉えようとする立場である。これは標語的に言えば、観光研究に関係論的、或いは生成論的な視点と調査手法を導入することを意味する。

注意すべきは、既に40年近くの蓄積を持つANTは一枚岩の理論ではない点である。Latour (2005: 121)曰く、ANTは、「諸々の差異を記録し、多様性を取り入れる力が無ければならず、新たな事例に接する度に作り直されねばならない」。ただ一つのANTは存在しない。よって、ANTの観光研究への活用に関しても、ただ一つの正解があるわけではなく、各研究者による創意工夫が必要となる。この点を踏まえ、本稿の目的は、観光研究へのANTの先行活用事例を参照しつつ、同時に主にラトゥールやローの理論にも学び、ANTに関する概念的理解と方法論に関する特徴や留意点を踏まえた上で、ANTを筆者なりの仕方でも観光研究に活用する方途を探ることである。

この点について、先行研究を見ると、海外フィールドワークや被災地訪問における学習者の学びのあり方とANTを関連づけて論じる研究(鈴木, 2020, 高橋, 2020)や、地域のアートプロジェクトとANTを関連づけて論じる研究(橋本, 2018)、災害復興とツーリズムの考察にANTを関連させる研究(大野, 2017)など、様々なアプローチでの研究が日本語圏でも蓄積されつつあり、学ぶところも多い。但し繰り返し注意したいのは、ANTが多様な考え方や概念を含む知的潮流であり、観光現象も極めて多様であるので、全ての研究に応用可能なマニュアルが存在するわけではない点である。ANTを用いた観光研究に関心を持つ研究者は、各自の創意工夫に基づきANTを観光現象の研究に活用し、「ネットワークの記述」という知的成果を生産する必要がある。従って本稿は、あくまでも筆者なりの具体的研究を開始する前の準備作業と位置づけられる。

本稿の流れについて、本稿前半では、ANTの基本的考え方と観光研究との関連性、及びANTを観光研究に活用することの含意について検討し、概念的な明瞭化を図る。その上で本稿後半では、具体的なANTを用いた観光研究を行う準備作業として、観光に関わる「事物」・「目的地」・「イノベーション」を、いかにANTを用いて研究できるかを検討する。その際、筆者が今後ANTを用いた観光研究を進めるにあたり念頭にある、持続可能な観光の推進に向けた取り組みや、コロナ禍で生じている現在の様々な観光現象を参照しつつ考察を進める。具体的に、何をどこから調査する可能性が筆者に開かれているかについての明瞭な認識に至ることが、本稿の到達点となる。この作業を通して本稿は、ANTを用いた観光研究の蓄積に厚みをもたらすことにも貢献する。

## 1. ANTの基本的考え方と観光研究

ANTの観光研究への活用に関する検討の前に、本節では、ANTの基本的考え方を再度、観光研究との関わりにおいて検討しておきたい。キーワードは「異種混交性」と「関係性」である。

### 1.1 異種混交性について

Michael (2017: 158)によれば、「異種混交性は、ANTが社会世界を様々な要素、即ち、人間、自然、技術等によって構成されているとみなすことを意味する」。或いは異種混交性は、世界が「人間、自然、技術の混合体——ハイブリッドから構成されていること」を意味すると言う。良く知られているように、ANTは人間と人間以外の存在を対立するものとしては捉えない。例えば「現代の学者」は、「書物、コンピューター、スマートフォン、照明、プロジェクター、机等々」の道具(=非人間)と組み合わせられることでしか、機能しえない(Michael 2017: 158)。社会は、自意識を持ち主体的・能動的に行為する人間主体を自然や技術と同様にその要素として含み、アクターの関係性により一時的に達成され、安定化することもあるが、アクターの動き次第では変容を遂げていく、様々なネットワークの重なり合いとして存在している。Jóhannesson (2005: 136)は、「社会的なものとは、異質な諸物質のパターン化されたネットワークである」と表現している。

社会を異種混交的なもののネットワークと捉えるこの点に関し、同じくJóhannesson (2005: 136)が、「観光は技術、テキスト、イメージ、社会実践等の組み合わせから成るハイブリッドなもの」と述べるように、観光が実に様々な事物を組み込み成立する現象である点は見やすい。Franklin (2012: 46)は、観光とは「異種混交的な物質性の複雑な組み合わせ」であり、「相互に構成的・リゾーム的で、生成や創発の過程へと参加し…他へと接続するもの」だと表現している。

では、観光がこのように異種混交性を特徴として持つものかどうか、その事実を我々はどう扱えば良いのだろうか。観光には様々な事物が参与している点をひたすら述べ立てても、当然のことを強調しているのみで、得られるところは少ない。筆者としては本稿で、先行論者の指摘を踏まえつつ、異種混交性という観点を観光研究に導入することの有益性について、以下の3点を強調しておきたい。それらは即ち、1) 調査対象に様々な物質性を据えることができる点、2) 観光現象における実在性の持続に、どの物質性がいかに貢献しているかという観点からの調査が可能となる点、3) 新たな物質性が導入されることで、それが何と繋がり、どう新たな実在性の生成に寄与していくかに関する調査が可能となる点、である。

一点目の、調査対象に様々な物質性を据えることができる点について、Duim, Ren, Jóhannesson (2012: 20)は、「計画書、広告、パンフレット、物理構造、食品、衣服、言説」など、非正統的であると見なされてきた多様な種類のデータを調査に活用できることになる意義を強調している。これは即ち、観光研究に異種混交的な様々な要素を導入することを意味する。社会学的な観光研究の大きな枠組みを形成してきた「観光のまなざし」論(J. Urry)においては、ともすれば、「身体・対象・空間・メディア技術」などの異種混交的な諸要素は、単に受動的に

観光者のまなざしや解釈を受けるものと位置づけられることになるが, ANTの視点を踏まえると, それら様々な物質性は, 観光現象を能動的に構成し可能としているアクターとなる。この点を筆者なりに敷衍すれば, 例えば, 観光者が訪れ「ロマン主義的まなざし」を注ぐ美しい一つの風景があるとして, その観光現象を「まなざし」と「そのまなざしが向けられる風景」の二者にのみ焦点を合わせ理解するのではなく, いかにして, どのような歴史的経緯のもとでそのような風景が成立したか, 或いは, 現在その風景を眺めるといふ観光行動を可能にしている物質的基盤は何か(交通機関, 展望台, 気候や天候, 風景を眺める欲望を喚起するメディア装置等), それらの様々な物質性はどのような関係を取り結んでいるかという点にも注目することが重要であるということである。このようにして, 異種混交性という観点を導入することで, 一つの観光現象に関する生成論的な記述が可能となる点は, 観光研究の視点と方法の豊饒化と言える。

二点目の, 観光現象における実在性の持続に, どの物質性がいかに貢献しているかという観点からの調査が可能となるという点については, Simoni (2012: 60) が, 観光現象における「非対称性・不公平性を固定化するものとして, 物質性が果たす役割への注目が必要である」と述べている点に注目したい。ある観光地において, 何が観光体験の対象に値し, 何が値しないのかという評価が, どのようにして固定化されているかという問題は, 歴史的観点からの分析や, 観光振興者による戦略や取組み(観光資源の発掘・演出・PR等)に関する分析など, 多角的に検討が必要となる問題である。しかし, 動かない点として言えるのは, ある観光現象の現場には, 必ず「見られるものと見られないもの」・「体験されるものと体験されないもの」等の形で, その場に存在する様々な物質性に関する非対称性が存在することである。その非対称性が, 当該の観光現象に参与する異種混交的な様々な物質性のあり方とどう相関関係を持つかという分析は, ある観光地や観光体験の変化の可能性を考える際に, 有用な観点である。例えば, 千年前から温泉が湧出する観光地において, 「体験されるものと体験されないもの」との非対称性を大きく根本的に変更することは容易ではあるまい。逆に, まなざしの対象を一時的に固定するために人為的に設定された展望台から眺める風景に関しては, 「展望台」という物質性のあり方を変化させることで, 観光地や観光体験の質を変化させることが難しいわけではない<sup>1)</sup>。

三点目の, 新たな物質性が導入されることで, それが何と繋がり, どう新たな実在性の生成に寄与していくかに関する調査が可能となるという点に関連して, Simoni (2012: 73) は, 「観光を通して新しいものや珍しいものに対する欲望と関心が選択的に養われ形作られる」際に, 「物質性はこの価値創造プロセスの一部をなす」と表現している。観光現象において無数の事例が日々発生しているこの「価値創造プロセス」には, 様々な異種混交的な要素が参与しており, 価値創造の様々なあり方や詳細を記述していくことは, 興味深く重要な問いであると筆者は考えている。

例えば, ある関西地方の寺院が, 仏教に伝統的な「猪目窓」を新しく御堂に設置したところ, それが「ハート型の窓」とSNS上で表現され若い世代の間で拡散し, 遠く関東からその寺院にまで, はるばる若い女性達が訪れたという現象がある<sup>2)</sup>。この現象について, 例えば若い女性層の一般的な心理やトレンド(癒しを求める態度, SNSでの承認欲求等)を指摘し, その現象を

解釈したり評価したりすることもできるであろう。それはそれで興味深い一つの社会認識の生産である。しかし、ANTを活用した研究の場合は、この現象が成立するにあたり関与している、異種混交的な物質性（猪目窓の設計図、猪目窓の建築過程に関わる木材・金属や人間、良い角度で写真を撮る為に必要となる畳、光の具合、スマートフォン、SNSプラットフォーム、紙媒体の雑誌記事、新幹線やタクシー等の交通機関、「ハート型の窓」を撮影した満足感の表現としてのSNSへの投稿データ等々）の関係性のあり方を詳細に追跡し記述することにより、観光現象における価値創造の一つの形、広く言えば、社会における価値創造の一つの形を捉えることが可能となる点が重要である。ここには、結果（若年層による寺院訪問）に関するメタ的視点からの説明や解釈への知的欲望ではなく、価値創造の発生の現場を認識することへの知的欲望がある。

この事例以外にも、一般的に観光という領域は、予想外の様々な物質性を観光商品・観光サービスへと組み込み、新たな価値を絶えず創造している。観光は社会における価値創造の重要な装置であり、その点に、観光が人類に対して持つ意義の一端もある。その際、いかにして新たな価値がその組み込みから発生しているのか、また、その新たな価値はいかなる意味で、誰によって、なぜ、価値あるものと評価されるのかという問題意識のもと、観光現象を追跡し記述する作業が必要である。それにより、人間存在にとって本質的な「価値創造とは何か」・「価値の体験とは何か」・「価値評価とは何か」という根本問題への認識を深めることができる。

## 1.2 関係性について

ANTは「関係主義的唯物論」とも言われるように、事物そのものよりも事物が取り結ぶ関係性を重視し、その関係性の詳細や変容に注目する立場を採用する。本節では手短に、関係性重視のこの立場が観光研究においてどのような含意を持つか、確認しておこう。

ANTにおける「アクター」とは端的に言えば、行為し、他からの行為を受けうるもの全てであり、人間主体に限定されない。逆に言うと、他のアクターに何らかの変化を及ぼしうるものは、人間であれ非人間であれ、全てアクターである。例えばLatour (2005: 71)はアクターについて、「差異を作り出すことで事物の状態を変容させるものはすべてアクターである…。どの行為者についても、発すべき問いは単純である。…その行為者は、他の行為者の行為の進行に変化をもたらしているか否か」と述べている。また、「事物は権限を与えたり、許可したり、可能性を与えたり、促したり、容認したり、提案したり、影響を与えたり、妨げたり、何かができるようにしたり、禁じたりしている。…誰が、何が行為に参加しているかという問題がまず徹底的に探究されねば、社会的なものの科学は始まりすらしらない」と言う (Latour 2005: 72)。

前節で触れたように、観光現象には様々な異種混交的な物質性が参与し、様々な形で複雑なネットワークを形成している。この点について、Duim et al. (2013: 8)は、「観光の複雑な多様性を理解する為に、我々は諸アクターのネットワーク化された流動的能力に注目する必要性がある」と述べている。またDuim (2007: 962)は、「観光の分析はネットワークを編み上げるアクターを追跡し、異質な諸契機間の連結の道筋を観察するべきである」と言う。これら先行研究者



の見解を踏まえれば, ANTを活用する観光研究は, 観光現象を構成する様々な異種混交的な物質性, 即ち, 人間の身体, 自然や文化から成る観光対象, 観光を可能とする技術やメディア等が, アクターとしていかに繋がりあっているかを追跡することを基本的な運動として成立するものとなる。

ここで注意すべきは, アクターはあくまでもネットワークの効果である点, 換言すれば, アクターは本質的に固定された自らの役割や定義を持つわけではないという点である。Duum et al. (2013: 9) の表現を借りれば, 「諸々の実体は, それが位置づけられた関係, それが通過する翻訳過程の結果として, 現在の形を取る。と同時に, それは諸関係によって, 諸関係の中で, 実践される。結果として, 原則的には全てが不安定で反転可能なものとなる」。強調すれば, ネットワークの生成の前に, 固定的な本質・定義・役割を持つアクターが, 実体的に存在するわけではない。アクターは「役割の定義と, シナリオの描写」(Duum 2007: 966) である「翻訳」過程によって, その姿を現す。研究者は, 人々や事物などのアクターに対し, いかにして意味や仕事が割り当てられるかを追跡する作業に従事することとなる。

観光にはこの翻訳の過程が様々な形で存在している。例えば, Jóhannesson (2005: 138) は, 観光者は「写真」や「お土産」という形で, 観光地という一つの場所を自分自身のネットワークへと翻訳していると言う。或いは, ネットワーク間のコミュニケーションを打ち立てて作動させている。また, 観光産業や観光地の地域住民が, 観光者を「入り込み客数」へと翻訳し, それが地域の観光の経済的成功・失敗の指標として活用されることとなるのも一例である。ここでは, 観光現象における翻訳がこれらの事例に留まるものではない点に留意しておきたい。どのような翻訳の形がありうるかは予め定められてはいない。抽象的に言えば, Law (2007: 5) が述べているように, 翻訳概念のそもそもの提出者である哲学者セールは, 「天使」, 「パラサイト」, 「ヘルメス」など, 「同じ世界に属さない二つの場所を一時的に繋ぐもの」の比喩を様々な場面に提出し, 「翻訳」もその一つと位置づけていた。もう一点, 日常的な意味での翻訳について考えても, 翻訳は二つの語を等価にするものだが, 完全な等価性は存在しないので, そこに「裏切り」が含まれることも重要である。この点に関連して Latour (2005) は, 「中間子 (intermediary)」と「媒介子 (mediator)」という概念を提出し, 前者を「意味や力を変容無しに移送するもの, インプットが決まればそのアウトプットが決まるもの」, 後者を「自らが運ぶことを期待されている意味や要素を変形し, 翻訳し, 歪曲し, 変容させるもの」と定義している (Latour 2005: 39)。この時, 「翻訳」については, 「ある原因を移送するのではなく, 二つの媒介子の共存を喚起する関係」であり, 「社会, 社会的領域, 社会的紐帯なるものは存在しないが, 追跡可能な連関を生み出しうる媒介子の間での翻訳は存在する」と言われる (Latour 2005: 108)。「翻訳」概念はこのように高い抽象度で定義されるものであり, 予めその内実が確定している概念ではない。よって, 異種混交的な要素の関係性を様々な含む観光においては, 様々な形の翻訳過程が存在しうる点に留意し, どのような翻訳が, いかに為されているかを発見していく必要がある。

## 2. ANT を用いて観光研究を行うことの含意

以上、第1節では異種混交性と関係性というANTの基本的考え方について、観光研究との関わりという観点から検討した。本節では、ANTを用いて観光研究を行う際に、そもそも実在性の在り方や研究者の立場をどのようなものと理解すれば良いのか、また、調査方法論としてのANTの基本的特徴をどう押さえておけば良いかという点について、その含意を考察する。

### 2.1 実在性の複数性

様々な異種混交的要素が一時的に関係を結び合いネットワークを構成し、要素間の関係性の変化によりネットワークも変化していくという形で実在性の在り様を捉えるANTにとって、原理的に、「唯一の客観的実在性」なるものは存在しえない。例えばLaw (2007: 14)は、「実在性は複雑なやり方で結び付けられる。様々な秩序化の様式、様々な実在性があり、お互いに還元不可能であるが故に、それらは的確に作動している」と言う。この点を観光現象という文脈に即して考える際の含意の一例として、「一つの観光地」という概念が自明のものではなくなる点に注目しておきたい。例えば或る温泉地があるとして、その温泉地は様々な立場の人々や事物によって、様々な形でその実在性が生きられる場所である。即ち、観光者にとっての、その温泉地における異種混交的な物質性や関係性のあり方と、温泉地で働く人々にとってのそれらのあり方、更にはその温泉地を観光振興対象として捉える人々にとってのそれらのあり方は、大きく異なっている。これは即ち、様々な形で実在性が組み立てられて作動し、生きられているということであり、「一つの観光地」という「一つの実在性」が客観的かつ唯一のものとして存在しているわけではないことを意味する。更にもう一点、例えば日常的空間が娯楽作品の舞台となった結果、観光者が訪問する場所となる事例など、「そもそもどこが観光地であるか」という問題への解答が自明ではなくなっているとも言える現代の観光状況において、ANTは、異種混交性や関係性を追跡しつつ、観光地という実在性が構築されていく運動を明らかにすることができる点にも留意しておきたい。

### 2.2 研究者の政治性

では、複数の実在性が並立する中で、ANTを用いて特定の実在性の在り様を追跡し記述を進める研究者や、その研究者が生み出す論文や著書等のテキストは、いかなるものとして位置づけられるだろうか。この点についてLaw (2007: 2-3)は、「世界が全て関係的なものであれば、テキストもまたそうである。この論文も一つの事例に過ぎないし、全体像を客観的に説明するというテキストには気をつけた方が良い」と述べている。即ち、ANTの立場では、唯一の客観的実在性を正確に表象し、超越的視点から世界全体を説明するテキストは存在しえない。ANTを用いてある実在性を記述したテキストも、関係性の世界の網の目の中に組み込まれ、アクターとして幾ばくかの役割を果たすものとして位置づけられる。いわばANTは、「フラットな存在論」

を採用する。

研究者が生み出すテキストがアクターとして役割を果たすこととなるというこの事態は即ち、ANTを用いて生み出されるテキストが、新たな実在性を作り出すことを意味することになる点に留意しておきたい。この点について Duim et al. (2012: 21) は、「研究することは、どこかにある実在性の蔽いを取るのではなく、特定の知識と実在性を構築することである」と述べている。

では、研究を通して特定の知識と実在性を作り出すこととなる研究者は、どのような態度や自覚を持ち研究を進める必要があるだろうか。この点について Jóhannesson (2005: 141) は、「介入者としての研究者という立ち位置を自覚すること」の重要性を説き、Duum et al. (2012: 170) は、研究者は「観光振興や観光研究に含まれる存在論的政治に敏感であることが要求される」と言う。

ここで言われている、存在論的政治に敏感であれ、とはどういうことであろうか。今一度確認しておけば、前節で触れた通り、例えば一つの観光地という空間や場所は、様々な実在性の併存により成立している。このことは即ち、観光に関わる空間や場所が、政治的に価値中立ではありえないことを意味していると言える。Duum (2007: 969) 曰く、「空間は…集団や個人（自然保護主義者、地域共同体、政府機関等）の主張に従属している。場所の生産・占有・制御は、継続中の闘争や対立のプロセスに巻き込まれている」。例えば、公共施設・公共空間として機能していた場所に、観光客向けの高級ホテルを建設する計画が持ち上がる場合、公共施設・公共空間の維持存続を期待する立場の人々と、高級ホテルの建設を推進する立場やそれに共鳴する立場の人々との間で、特定の場所や空間を巡る考え方や、彼らが編み上げる異種混交的なネットワークの在り方に関して大きな相違が生じることなど、見やすい事例であろう。

この状況において、ANTを用いて特定の実在性の在り方を追跡し記述する観光研究者は、「様々な実在性」に直面するのみならず、「様々な実在性から選択する可能性」、「様々な実在性のバージョンを制定する／上演する (enact) 可能性」にも直面していると Duim et al. (2012: 18) は言う。観光研究者は複数の実在性を前にして、何に注目し、どのようにアクターを追跡し、どのように実在性を描き出し構築するかという自らの研究活動を通して、特定の「善」にコミットすることとなる。ここに「観光研究者の倫理」の問題が浮上するが、これは一義的結論が可能な問題ではない。本稿で強調できることは、ANTを用いる観光研究者は、「実在性を描写することは常に倫理的に価値を帯びた行為である」(Law 2007: 17) ことを銘記し、「どのような社会的実在をより強く（或いはより弱く）作り上げたいのかと問う義務がある」(Watson 2007: 36) ということである。

### 2.3 調査方法論としてのANTの基本的特徴

調査方法論としてのANTについて、Jóhannesson (2005: 137) は、「他の方法論と異なり、ANTは方法に関するハンドブックを持たない。何を為すべきかに関する記述とガイドラインのみがある」と言う。先に引用した通り Latour (2005) も、「この新たな学は…新たな事例に接す



る度に作り直されねばならない」と述べている。ANTを活用した全ての研究に共通する、明瞭かつ確定した方法論は存在しない。しかし、「何を為すべきか（逆に言うと、何を回避すべきか）」については、以下のように、ANTに特有の方法論的立場がある。

一つ目の特徴は、一般概念を前提し、それを現象の説明に使わないという点である。多くの社会理論は、マクロとミクロ、ローカルとグローバル、行為者と構造などの枠組みを用いたり、「文化資本」や「階級意識」等の一般概念を用いて現象を説明したりしようとする。しかしANTの立場から見れば、この作業は、説明されるべき事柄を逆に説明原理としてしまうという転倒を冒してしまっている<sup>3)</sup>。哲学者ドゥルーズがかつて述べたように、「抽象こそが説明されねばならない」。先述の通り、ANTは理論と現実に関して、「フラットな存在論」を採用している。この点について Duim et al. (2012: 20) は、観光現象の文脈に引き寄せ、「ローカル、外国的、真正的、商業的などの特徴やアイデンティティは結果であり、社会関係の基礎にある所与ではない」と表現している。例えば「地域の名産品」や「地域の本物の伝統文化」が、どのようなアクターネットワークにより結果として生み出されているかを追跡する必要がある。

二つ目の特徴は、事前に調査対象を確定してしまわないという点である。この点について Latour (2005: 11-12) は、「最もしてはならないことは、繋がり、の形、大きさ、異種混交性、組み合わせを予め限定してしまうことだ」と述べ、「アクター自身に従うこと」を提唱している。現象の複雑さに徹底的に付き合うこと、必要があれば些細なものとも思われがちなアクターを追跡することが要請される。Duum et al. (2012: 20-21) はこの点について、「ネットワークの作動や秩序化を設立するには経験的探求が不可欠」で、「詳細な記述により、場所・出来事・現象・アクター・対象の複雑さが示される」と言う。更に、「ネットワークの形や重要性や作動が探究開始前に知られておらず、前提もされない」、「フィールドワークに関する〈非領土的〉アプローチ」が採用されるべきであり、この時、研究作業の途上で、「一つの観光目的地、イノベーションプロジェクト、持続可能性に関する多様な実践」等のフィールドが浮上してくるとも述べている。どこまでが一つのネットワークであるかは、調査の開始前には確定されえない。

調査方法論としてのANTの特徴について、本稿では以上の二点に加え、Latour (2005) が、ANTを用いた良い調査報告とは、そこに登場するアクターが全て「何かを為していること」だと述べている点も強調しておきたい。Latour (2005: 128) は、「ANTによる良い報告とは、全てのアクターが何かを為しており、ただ座っているのではない物語、記述、命題である。…各々のアクターは、分岐点や出来事、或いは新たな翻訳の起源となる」と述べている。このことを逆に言うと、「アクターがただ座っているだけの調査報告」は、ANTを活用した研究としては失敗と評価されることとなる。ANTを用いた研究が、全て成功裏に完了するわけではない。研究者が生み出す調査報告という成果は、研究者の力量により、その都度一つの「出来事」として生成し、先述したANTの「フラットな存在論」により、それ自体が関係性の網の目へと再度組み込まれていくものと銘記しておく必要がある。

更にもう一点、極めて重要な点として、ANTにおける「ネットワーク」とは、「電話網・高速

道路網・下水網など」の「相互連結した点の集まりから成る事物」を指すものではなく、「概念」であり、「何かを記述するための道具であって、記述される何かではない」点を銘記しておく必要がある (Latour 2005: 129-131)。誤解されがちだが、ANTは必ずしも「ネットワーク状のもの」を記述する理論ではない。Latour (2005) 曰く、ANTは「全くネットワークの形をしていないトピック (交響曲, 法律, 月の石, 彫刻)」についても調査・記述・報告をすることが可能である。

### 3. 調査対象と調査手法に関する検討

ここまで、ANTの持つ基本的考え方やANTを用いて観光研究を行う際の含意について検討してきた。以下では、具体的に可能な調査対象や調査方法についての検討を進める。本稿はあくまでも筆者が今後、「アクターを追跡する」観光調査を実施する際に活用しうる視点や概念、方法論的注意点を明瞭化することを主目的としている。その目的遂行のため、以下、B.LatourによるANTへの入門書“Reassembling the Social” (2005) や、ANTを用いた観光研究の先行事例が複数所収されている先行研究書“Actor-Network Theory and Tourism” (2012) を主に参照しつつ考察を進める。また、今後の具体的な調査の背景として、コロナ禍により更に世界的に推進が加速している「持続可能な観光」や、ポストコロナ時代に向けた様々な観光振興の取組みや観光現象を念頭に置く。どのような対象にどう着目して調査を進めるかについては様々な可能性がありうるが、本稿では「事物」・「目的地」・「イノベーション」の3つのカテゴリーに分けて、考察する。

#### 3.1 「事物」を調査する

先述の通り、様々な物質性を観光研究で扱うことは、1) 非対称な関係性を持続させる機能を果たすものとして物質性を捉えられること、2) 新たな物質性が導入されることでいかなる価値創造が生じるかを考えることができること、という点が基本的着想として重要な点である。その上で、「事物」をどう調査するかという問題については、具体的には「事物の複数の実在性を追跡すること」が課題として設定できる。

この調査課題について、Simoni (2012) は、ANTの方針に沿い、事物という「ブラックボックス」を開けてみるのが重要だと言う。彼自身は、「キューバの葉巻」という事物を取り上げ、それが「単一の実体」としてではなく、「キューバの土地と気候、多くの熟練した専門家の仕事の特定の質を集めた複雑なアレンジメント (組み合わせ)」として捉えられるべきものだと述べ、様々な諸要素がキューバの葉巻を「ユニークで最上の生産物」としていると言う。事物を、それを構成する諸要素へと分解し、それら諸要素が取り持つネットワークを追跡することが肝要である。この追跡作業の結果、Simoni (2012) は、「葉巻」について、「キューバ観光のアイコンとしての葉巻」、「社会主義体制社会での商品としての葉巻」、「路上で販売される〈品質の良さが強調

される)葉巻」,「農村観光体験で〈自然なもの〉として販売される葉巻」という4つの実在性のバージョンを提出し,それらがいかに様々な形で諸実体(国家,工場,市場交換,田舎の景観等)と関係性を持ち,異なる実在性を「制定/上演(enact)」しているかを報告している。Simoni(2012:76)は,観光研究者の役割は「物質性の様々な制定/上演(enact)の形を説明すること」,「様々な関係性や入り組んだ小道を追跡し,異なる実在性が収束したり発散したり,重なり合ったりする様子を描くこと」だと言う。

以上の,「事物の複数の実在性を追跡し記述すること」という調査の意義はどのようなものだろうか。この点について,筆者としては,まずは観光現象に関するニュアンスに富んだ,厚みのある記述が蓄積されることそれ自体が,社会に関する認識の豊饒化という意味で意義を持つと考えている。加えて,既にその価値が当然視されている事物がいかに発生したかに関するプロセスが明らかになり,「現在の価値秩序の相対化」が図られうる点,及び,新たな事物の導入によるネットワーク形成のあり方の記述により,「現在進行中の新たな価値創造の取組みの明瞭化」が図られうる点,の二点が重要であると考えている。

この二点のうち,前者の「現在の価値秩序の相対化」について更にその意義を考えてみると,例えば,キューバにおける「葉巻」など,地域を象徴する産品や観光資源が,当然価値あるものとして「ブラックボックス化」する過程を追跡し直し,観光における非対称性(関係性の固定性)がいかにして生成したものであるかを明らかにすることは,人々が共有する価値が,一回的な歴史のプロセスの中で,多分に偶然的な契機を孕む関係性の生成の中で生じてくることを認識することであると言える。このような形で,「価値の生成の偶然性」の認識を深めることは,抽象的に言えば,世界の可塑性の認識を深めることに繋がり,自由や別の可能性の存在への自覚や信念を人々にもたらすことになる点に価値がある。具体的に観光現象に引き付けて言えば,例えば或る観光地の住民や観光事業者にとって,「必ずしも現在の観光の形を絶対的に維持・保守する必要は無く,別の新たな可能性もありうる」という認識をもたらし,一つの観光地において「別の可能性」を模索し,新たに自由な取組みを始める態度を養うことに繋がりうる点に価値があるだろう。

ここで,「現在の価値秩序の相対化」に繋がりうる記述を生み出すこの調査においては,特に,観光振興者の取組みが重要な要素として存在する点に留意しておきたい。ANTを用いる観光研究者は,例えば或る観光地を代表する事物があるとして(特産品や食,風景,文化芸術など),その事物のどの質や側面が前面に押し出され(同時に別の側面は沈黙させられ),いかにして観光客の訪問意欲を喚起する事物として差し出されているか,という点を調査することが必要である。追跡されるべきは,誰が,誰向けに,どの事物のどの側面を,どう魅力があるものとして(=他とは異なるものとして)訴求するかに関する具体的な取組みと,そこに関与する様々な物質性と関係性のあり方である。逆に,その時に何が沈黙させられるか,不在のものとなるかについての追跡も必要となる。更に同時に,特定の事物が観光振興者の思惑を離れ,観光者やメディア等の別のアクターのネットワークへと翻訳され,いかに別の実在性のバージョンを生み出

すかも、追跡する必要がある<sup>4)</sup>。

もう一点の、「現在進行中の新たな価値創造の取組みの明瞭化」については、コロナ禍において、持続可能な観光への関心が高まり、デジタル技術等の新技術の導入が活発に進む現在、調査への可能性が多様に開かれている。例えば、持続可能な観光に関して、国連のSDGsにも掲げられているように、地域の伝統製品の販売促進の取組みや、地産地消の理念のもと現地食材を現地で消費する取組み等が更に国内外で活発化していくことが予想される。それらは「新たな価値創造の取組み」と評価されうるが、そこにいかに新たな物質性が持ち込まれ、関係性の変容が生じ、或る事物の定義や役割が変化しつつあるかといった観点から、調査を進めることが可能である。着目対象となりうる事物としては、伝統製品や食材に留まらず、持続可能な観光の推進を目指し、行政機関が策定する政策文書（例：京都市による「京都観光モラル」等）が具体的事物として、誰によってどう受け入れられ、それが人々や事物の実際の行動にいかにかに翻訳されていくかを追跡する作業も考えられる。また、自転車などの「環境に優しい」交通手段が事業者により市場に導入されたとして、それが取り結ぶネットワークの追跡と、生み出される実在の描写も可能である。Latour (2005: 80) は、「作業場・設計室・マーケティング対象者の事前調査」など、「モノが会合、計画、見取り図、規則、試行を通して複合的で複雑な生を得ている」場所に注目する有用性を示唆している。持続可能な観光の推進の取組みでは、新たな考え方を示す文書や新技術などの事物が設計室や作業場を通して様々に導入されるので、その現場から、調査を始めることができる。

### 3.2 「目的地」を調査する

そもそも現代の観光現象において、観光の「目的地」とは何かという問題は複雑である。観光政策や観光マーケティングの文脈では、ある特定の広がりを持った空間（特定のエリアや街など）に有形無形の観光資源が配置されている状況を指して「観光目的地」と認識し、観光振興が図られている。しかし、自分以外の人々の日常、即ち「異日常」を楽しむ街歩きなど、人々の日常生活空間が観光対象となる状況、映画やドラマのロケ地訪問やアニメ聖地巡礼など、観光者の関心により有名観光資源以外の建物や公園等が観光対象となる状況、オンラインツアーのように、実際に現地を訪問しない観光の誕生など、いつ、どこが、どのような意味で観光の目的地となるかという点に高い流動性が見られるのが現代社会であるとも言える。

このような状況で目的地を捉えるヒントとなる考え方に、Duim (2007: 967-968) が提出した「ツーリズム・スケープ」という着想がある。ツーリズム・スケープは、「異なる社会や地域を越境する多様なアクターネットワークで、交通機関や宿泊施設、観光資源、環境、技術、人々や諸組織を連結するもの」と定義される。筆者なりに敷衍すれば、この考え方は、そもそも、固定的なユークリッド空間の中に観光資源が配置されている「場所」があり、人々が何らかの手段でそこへと「移動」してきて観光経験を行うという、観光に関する従来の理解の枠組みを採用せず、人や技術や環境等が様々に繋がったネットワークが作動する現象として観光が成立していると理



解する枠組みだと言える。或いはこれは、「場所」と「モビリティ」（移動性）とを二項対立的に捉えない着想である。Duim (2007) は、ツーリズム・スケープは「観光サービスを提供し消費する人々や諸組織」, 「文化や自然等から成るハイブリッドな環境」, 「ツーリズム・スケープを時間的空間的に拡張するネットワーク化された機械や技術」を含むと規定しており、現代社会における観光の目的地を考えるということは、これら諸要素の構成する関係性のあり方を調査することになる。「ツーリズム・スケープ概念を用いた研究は、いかにアクターや組織が、自らを構成する要素や部分を可動的なものとしたり、並立させたり、繋ぎ止めたりしているかについての関心から成る」とも言われる。

以上のツーリズム・スケープの着想は、「空間性」を異質な諸要素の関係性へと分解して理解する考え方であるが、同時に、「時間性」も、関係性へと分解して理解されうる点に留意しておきたい。一般的に現代社会の人間の生活は、カレンダー・時計・時間割等、個々人の行動を時間的に同期する技術を活用して成立していると言える。観光においても、鉄道や飛行機の時刻表、アトラクションの開館時間・閉館時間の指定、観光地での推奨ルートの提案（空間の提案は即ちルートを踏破する時間の提案を含む）など、様々に時間を同期したり、人々の動きを揃えたりする技術が活用されている。人々が活動する時間は、均一に様に流れるのものではなく、時間を区切り空間化した上で関係づける実践の中で成立するものである。

これらを踏まえると、空間性と時間性の両方が関係性へと分解されることが可能であると表現されうる。では、関係性へと分解される空間性と時間性をどう調査・分析できるだろうか。この点については、Peters (2012: 99) が、「空間と時間は物質的・非物質的要素の異種混交的な秩序化に関係する」と述べ、「時間の長さや経過、踏破される空間」を指示するものとして、「パッセージ (Passage)」という概念を提出していることに注目し、援用したい。「パッセージ」の特徴としてはその他に、物質的要素と言説的要素を含む点、計画はされるが偶然性を除去できない点、特定の人々や場所、時間の包含と排除を含み、本質的に政治的なものである点が挙げられる。観光振興者は、自らの担当エリアや観光スポットに関し、特定のやり方での時間と空間の過ごし方（パッセージ）を構築し人々に提示し、一つの実在性を生み出す。人々はこうして提案された時間と空間の過ごし方を目的地において実践する。ただし同時に、提案されるパッセージが絶対的なものではなく、観光者がそれを変容し、別の実在性を生み出すことが可能である点も重要である。この点に関連して、Bøerenholdt (2012: 111) は、「目的地は誘客を行うアクターが作り出すイメージやブランドに関して一貫性を持つものではなく、より偶然的で脱中心化されている」と言う。ANTを活用する研究者は、一方で、観光振興者によるパッセージの構築作業に、他方で、観光者によるその受容や変容・逸脱といった現象に着目し、それらに含まれる異種混交的な諸要素の関係性を辿る作業が必要となる。

目的地を考えるに当たり、本稿ではもう一点、Bøerenholdt (2012) が指摘する、目的地における「現前と不在」の問題にも着目しておきたい。Bøerenholdt (2012: 121-123) は、目的地に関する5つの次元として、先述のユークリッド空間と理解される「環境としての場所」、観光者



が歩いたり、眺めたり、話したりという形で身体的に経験する「身体化された空間」、観光者が同行者やたまたま居合わせた他の観光者と様々な触れ合いをする事態を指す「空間の社交性」、観光者の思い出や土産物、写真の中に存在する「場所の記憶」、最後に、ガイドブックやウェブサイト等の中に浮遊する「場所のイメージ」、を挙げた上で、最後の2つである「場所の記憶」と「場所のイメージ」を「不在のもの」と称し、その重要性を強調している。確かに我々は、実際に観光者が身体的に目的地に滞在する時間があくまでも限られているという点を忘れてはなるまい。よって、観光者が「場所の記憶」として目的地を経験し続ける期間の方が圧倒的に長いことを認識し、その事実が観光現象の成立にどう寄与しているかを調査する必要がある。観光振興者や他の観光者が作り出す「場所のイメージ」が、観光者の目的地選択に大きく影響を与えることを思えば、目的地を考える際に、実際に物質的・身体的に目的地に存在しているもののみならず、記憶やイメージなど、その場に無い「不在のもの」の働きを追跡することも必要である。「目的地の実在性はその不在と、より正確には、その不在がいかに関管理されるかと深く関わる」と Boerenholdt (2012) は言う。

以上の、先行研究者が提示する、「ツーリズム・スケープ」、「パッセージ」、「不在のもの的重要性」という概念や考え方を念頭に置くと、具体的にいかなる調査が可能だろうか。

まず、「観光サービスを提供し消費する人々や諸組織」、「文化や自然等から成るハイブリッドな環境」、「時間的空間的に拡張するネットワーク化された機械や技術」を含む「ツーリズム・スケープ」については、それが様々なスケールの対象に適用可能である故に、世界的に推進が期待される持続可能な観光についても、多様な調査の可能性が存在する。例えば、一つの街というスケールに着目するならば、持続可能な観光の先進地域に関する「Green Destinations」という認証制度において、適格と選定された街（京都市、釜石市等）に着目することが可能である<sup>5)</sup>。或いは、少し対象のサイズを絞り、持続可能な観光を推進する考え方（「地産地消」等）や新技術（各種の環境負荷低減技術）を導入した特定の宿泊施設において、どのようなツーリズム・スケープが構成されているかの調査も可能である。或いは逆に、出発点として、特定の目的地における観光者による観光行動に着目し、現地ガイドの雇用や現地資本の飲食店の使用、真正な地域文化の経験や地域産品の購入が国連世界観光機関により推奨されている中、観光者の取るこれらの「より良い観光行動」が、どのような異種混交的な構成要素を秩序化することで可能となっているかを調査することも構想できる<sup>6)</sup>。

次に、「パッセージ」については、コロナ禍の2021年現在、目的地の選定や目的地での過ごし方について、マイクロツーリズム、ステイケーション、「三密」を回避した野外型観光など、新たな現象が誕生しつつある点を踏まえて考えてみたい。認識すべきは、これらが目的地における「時間の長さや経過、踏破される空間」の変容を含むという事実、即ち、新たな「パッセージ」の構築と提案を含む事実である。よって現在、或る地域の観光振興者や特定の観光事業者の取組みに注目し、観光者の滞在時間の延長、消費単価の向上、高付加価値の観光経験の提供、リピーター化の向上等の目的達成に向け、彼らがいかに異種混交的要素の再編成により新たな「パッ

セージ」を作り出し、それをいかに観光者に届けようとしているかを調査することは時宜に叶っている。逆に先述の通り、観光者側に着目し、観光者が新たなパッケージを自分なりにいかに翻訳し、そこからの逸脱や予想外の行動等を生み出しているかの調査も可能である。

最後に「不在のものの重要性」については、コロナ禍において身体的な移動の制限が世界的に様々な程度で存在する中、「目的地にとっての観光者の不在」と、「観光者にとっての目的地の不在」がかつてない規模で発生している点に注目せざるをえない。即ち、目的地にはかつて存在した観光者が皆無か、或いはごく少ない数でしか存在せず、観光者にとっては、実際に現地へ赴くことが不可能である故に、イメージや記憶によってしか目的地と接触できない状況が世界規模で生まれている。いわばコロナ禍は、現前と不在とのバランスを大きく変容させてしまったと言える。例えば、オンライン上での目的地情報の発信の強化や、地域の特産物を事前に配送しておくオンラインツアーの取組みの誕生などは、「現前と不在」との関係性の現代の変容を含む現象である。観光者の方については、実際に目的地を訪問できない中、かつての旅先での写真を見直して思い出に浸ることや、その旅先に関する動画を動画共有サイトで視聴したりすることなどの行動が活発化していると考えられる。これらの現象はコロナ禍がもたらした「現前と不在」との関係性の強制的な変容に由来している。この点を踏まえ、現在の観光現象にいかなる変化が生まれ、その変化がいかに生産・管理されているかという観点からの調査が可能である。

### 3.3 「イノベーション」を調査する

観光という領域においては、旅行会社による旅行企画やツアー、宿泊施設による宿泊プラン、観光地における各種観光体験やアクティビティなど、新たな価値を創造する取組みが絶えず為されており、日々、様々なイノベーションが生まれている。逆に、かつてはサービスの一方的な享受者・消費者として認識されがちであった観光者についても、現代ではSNSを用いた情報発信などのコンテンツ創造を行い、価値創造に寄与する側面を持ち始めている。観光はイノベーションや価値創造をその本質とし、ANTがその初期に科学的事実の誕生に着目していたことを思えば、ANTを用いて様々なイノベーションを調査することも重要な課題である。

Duim et al. (2012: 33) は、従来、イノベーションの生成が、起業家精神に満ちた独立した単一のアクターの能力に帰せられてきた点を批判し、「関係主義的な起業家精神」という観点を提出している。この考え方に従えば、起業家精神を持つ存在は、一人の人間に限定されず、複数の人間の集まりや企業などの組織、或いは一つの地域といった形を取りうる。その上で、様々な事象の関係性・連結・結合の発生という実践的プロセス、即ち「関係性の制定/上演」が、イノベーションを生み出すとされる。イノベーションは、優れた能力を持つ英雄的な個人が、様々なアクターを単一の全体性へと統合することで生み出されるものではない。このように関係性のもとでイノベーションを捉えることについて、具体的に彼らは、Jóhannesson (2005) による調査事例である、アイスランドの神話とヴァイキング文化に基づく観光開発の事例を取り上げ、その取組みにおける関係性の秩序化のスタイルを4つ抽出している。それらは即ち、経済理論や地域

振興理論に基づく実践に関係する「経済発展」というスタイル, イノベーションへの参加に関する市民としての動機付けや感情的動機付けに関係する「仲間意識」というスタイル, プロジェクトに参加する意志の発生の端緒となったり, 一つのアクターネットワークが新たなアクターに繋がることへの開かれを保証したりする, 比喩的に「スパーク (点火・閃き)」と称されるスタイル, 世界の中での自分の進み方を見つけることやイノベーション活動における時間やリズムの重要性を示す, 比喩的に「船に慣れること」と称されるスタイル, の4つである。

この4つの関係性の秩序化のスタイルに関し, 特に日本の地域観光振興の文脈に照らし合わせると, 「スパーク」と「船に慣れること」の観点の導入が理論的に興味深いのではないかと見受けられる。「スパーク」については, 地域振興における「よそ者」の参加の重要性が時に語られる中, 「よそ者」という一般概念では, 具体的な関係性の生成のプロセスが見え難い点に留意したい。「よそ者」という一般概念で満足せず, 誰が, 何をきっかけとして, どのような動機が喚起され, どのような形で地域観光振興に参画し始めるのか (アクターネットワークに組み込まれるのか) に関するプロセスを追跡し, 各事例に存在する「出会いの偶然性」の質を描き出すこと, また, その記述や報告が他の地域への示唆を与えるものとなることが期待される。「船に慣れること」についても同様に, 住民が主導する地域観光振興において, 住民のエンパワーメントの実現が語られる中, 取組みに参画する住民が, 時間をかけて, どのような自己の能力や自己肯定感を育てていくのかに関する多様な事例調査の蓄積が期待される。

イノベーションの調査についてはもう1点, 本稿でも触れてきたように, 持続可能な観光の推進を念頭に置く必要があるが, Duim et al. (2012: 38) は, 持続可能な観光は, これまで観光の「外部性」として考慮対象とされて来なかった「人々」や「地球」を内部に組み込む運動が必要となる点, また, 持続可能な観光開発は, 「新たな実践や物質性と同様に, 状況に関する新たな定義を含む必要がある」点を指摘している。彼らは更に, 持続可能な観光の推進という, 人間同士, 或いは人間と自然との「新たな同盟」は, 以下の5つの相互に関係する変化を必要とすると言う。それらは即ち, 1) 人間や組織, 機械や手続き等の導入と排除を通じた「量的変化」, 2) 量的変化に伴い生じる, どのような人間や事物が望ましいものとみなされるかに関する「質的变化」, 3) 量的・質的变化の結果として生じる, 新たな特性や能力を持つアクターの誕生, 4) 物質性への活動の委任のあり方の変化 (化石燃料に替えて再生可能エネルギー, 航空機に替えて鉄道, 行動規範の文書による固定化等), 5) これらの変化がルーチン化し安定した本質となり, 当然視されるようになること, である。

本稿では先述のように, 持続可能な観光の推進について, 「現在進行中の新たな価値創造の取組みの明瞭化」という観点から「事物」を調査する方向性や, 「ツーリズム・スケープ」の観点から様々なスケールの「目的地」を調査する方向性を検討してきたが, Duim et al. (2012) による5つの変化は, 持続可能な観光の推進における「イノベーション」を調査する際に有益な着眼点を巧みに整理しており, 事物や目的地の調査に際しても援用すべき着想であると考えられる。本稿では, 持続可能な観光に向けたイノベーションを行う主体や現場は多岐にわたり, 一元的な

管理者や推進者のもと、整然と計画通りに実現されていくものではない為、多角的な観点からの調査の蓄積が必要である点を強調しておきたい。例えば観光行政を出発点とすれば、国連世界観光機関（UNWTO）や各国政府・自治体の担当部門（観光庁、観光協会、DMO等）、観光関連団体やNPOが持続可能な観光の推進に向けた啓発事業や行動基準等を策定し、実現を呼び掛けるといった関係性の秩序づけの取組みが、どこでどのような量的・質的变化を喚起できているかという観点からの調査が必要である。また、観光事業者については、日本でもSDGsの達成に向けた企業の取組みが徐々に活発化しているが、そもそも誰が、何を契機として、持続可能な観光の推進に向けた量的・質的变化をもたらす関係性の秩序づけを駆動するかという問題意識のもと、調査を始める必要がある。或いは、様々な意向を持つアクターが無数に存在する故に、最も厄介な調査対象であるが、持続可能な観光の推進に向けて決定的に重要な役割を果たすはずの観光者自身が、様々なメディアの情報に触れつつ、持続可能な観光の推進に向けた取組みに関心や肯定的評価を持つに至るプロセス、或いは実際に自らの行動を変容させるプロセスに関する調査も必要である。加えて、例えば海外の先行事例を取り上げ、持続可能な観光の取組みが既にルーチン化し当然視されているあり方を追跡し、どのようなネットワークの形成がそれを可能としたかを解明する調査も有益であろう。

## 終わりに

冒頭で述べた通り、本稿の目的は、B・ラトゥールやJ・ローのANT理論や観光研究へのANTの先行活用事例に学びつつ、更にANTを洗練させた形で筆者なりの関心に基づき観光研究に活用するために、概念的明瞭化と調査方法の検討を準備的に行うことであった。再度、本稿の成果を総括し、結論とする。

第1節では、ANTの基本的考え方である「異種混交性」と「関係性」概念の内実を検討した。主にラトゥールの議論を踏まえつつ、異種混交性という観点を観光研究に採用する意義、及び、どのような形態の「翻訳」がありうるか、観光の文脈で具体的に探っていくことの必要性が明瞭化した点が成果である。

第2節では、ローの議論を踏まえつつ、ANTを用いて観光研究を行うことの含意が解明された。具体的にはまず、いかなる場所が観光地であるかの定義が揺れ動く現代において、実在性の複数性という観点を導入することの有効性が確認された。また、「フラットな存在論」を採用するANTを活用する場合、観光研究者自身も、ネットワークの調査や記述を通して実在性を作り出す存在であること、よって、自分自身が何らかの「善」にコミットしてしまうことを自覚する必要性が明瞭化した。また、ANTの調査方法論としての特徴を4点取り上げ、その含意を再認識した点も本節の成果である。

第3節では、事物・目的地・イノベーションという観点から、具体的にいかなる調査が可能かについて、先行研究を参照しつつ検討した。



事物の調査に関しては、「事物の複数の実在性」を調査する意義について考察し、この調査が「現在の価値秩序の相対化」と「現在進行中の新たな価値創造の取組みの明瞭化」をもたらす点の有用性が明瞭化できた。

目的地の調査に関しては、「ツーリズム・スケープ」について、様々なスケール（街全体、宿泊施設等）での調査や観光者の行動の調査が可能な点、「パッセージ」について、コロナ禍での観光事業者の様々な取組みを「パッセージの再構築と提供」と捉えることが可能な点、「現前と不在」の問題について、コロナ禍におけるオンラインツアーの発生や観光者による目的地の記憶やイメージの享受・消費という現象の検討が必要である点が明瞭化できた。

イノベーションの調査に関しては、「スパーク」と「船に慣れること」と比喩的に称される分析視点を地域観光振興の現場での調査に採用することで、地域観光振興に関する理解が深まる点や、持続可能な観光に向けたイノベーションにおける5つの変化を踏まえた上で、持続可能な観光の推進主体が多様であり、それに起因して、調査の出発点も多様でありうる点が明瞭化できた。

以上により、筆者によるANTを用いた具体的な観光調査の準備作業として、ANTを用いた観光研究に関わる諸概念の明瞭化と、採用されるべき調査方法が明らかとなり、本稿の目的が完遂された。次の課題は、実際に、これまで筆者が研究・教育実践で関わってきた地域や事業者、及び幾つかの観光形態（コンテンツツーリズム、スピリチュアルツーリズム）を対象に、具体的な調査を推進することである。

謝辞：本研究は、JSPS 科研費・課題番号 18K11851 の助成を受けたものである。

## 【注】

- 1) 観光者のパフォーマンスにより、物質性が設計者の意図通りに使用されるとは限らない点も重要である。Simoni (2012) は、「観光プロモーションや管理制度により或る物質性の質や効果が形成される。その時、特定の可能性が現実化され、別の可能性は沈黙を強いられる。しかし、秩序化は常に意図せざる結果、過ち、予見できない行為者・の余地を残している」と述べている。
- 2) 京都府宇治田原町の「正壽院」の事例であり、筆者は2018年8月27日と2019年9月15日の2回、副住職に聞き取り調査を実施した。
- 3) Latour (2005) の立場は、「社会的なものの社会学者」とは「社会理論」に関するスタンスが異なる。「理論とは消極的で無内容で相対論的な格子線であり、このように抽象化することで、アクターに代わって社会的なものの構成要素を総合しないで済む」とラトゥールは言う。
- 4) 調査対象となりうるのは、観光振興やPRで戦略的に取り上げられている事物や、新しく導入される事物のみに留まらず、特定の地域や観光現象の現場に歴史的な厚みを持って存在し続けてきた事物でもありうる。例えば宗教文化観光に関わる「御朱印手帳」や、物語観光に関わる「特定の地域に根付いた文学作品」なども、ANTの追跡の対象となりうる。このような対象については、Latour (2005) が言うように、「アーカイブ、文書記録、回顧録、博物館の収蔵品などを用いて、モノに光を当て直す」ことや、「歴史家の説明を通して、機械や装置や道具が生まれた重大局面を人工的に作り出す」作業が必要となる。



- 5) 「Green destinations」の2020年度版TOP100選に、日本では北海道ニセコ町、岩手県釜石市、神奈川県三浦半島観光連絡協議会、京都市、岐阜県白川村、沖縄県が認定されている。JTB総合研究所(2020)「世界のTOP100エリアのうちの6エリア」最終閲覧日2021年5月28日, <https://www.tourism.jp/tourism-database/figures/2020/12/sustainable-tourist-destination/>
- 6) 国連世界観光機関 (UNWTO) は、これらの「より良い観光行動」を取る観光者の育成に向け、「責任ある旅行者」に関する行動項目を策定し、冊子を作成している。

## 【引用・参考文献】

- Børenholdt, J. (2012). Enacting destinations: The politics of absence and presence. In R. Duim & C. Ren & T. Jóhannesson (Eds.), *Actor-Network Theory and Tourism; Ordering, materiality and multiplicity* (pp. 111–127). Oxon, UK: Routledge.
- Duim, R. (2007). Tourismscapes: An Actor-Network Perspective. *Annals of Tourism Research*, 34 (4), 961–976.
- Duim, R., & Ren, C., & Jóhannesson, T. (2012). How ANT works. In R. Duim & C. Ren & T. Jóhannesson (Eds.), *Actor-Network Theory and Tourism; Ordering, materiality and multiplicity* (pp. 13–25). Oxon, UK: Routledge.
- Duim, R., & Ren, C., & Jóhannesson, T. (2013). Ordering, materiality, and multiplicity: Enacting Actor-Network Theory. *Tourist Studies*, 13 (1), 3–20.
- Franklin, A. (2004). Tourism as an ordering: Towards a new ontology of tourism. *Tourist Studies*, 4 (3): 277–301.
- Franklin, A. (2012). The choreography of a mobile world. In R. Duim & C. Ren & T. Jóhannesson (Eds.), *Actor-Network Theory and Tourism; Ordering, materiality and multiplicity* (pp. 43–58). Oxon, UK: Routledge.
- 橋本和也 (2018) 『地域文化観光論 新たな観光学への展望』ナカニシヤ出版
- Jóhannesson, T. (2005). Tourism translations: Actor-Network Theory and tourism research. *Tourist Studies*, 5 (2), 133–150.
- Latour, B. (2005). Reassembling the Social: An Introduction to *Actor-Network-Theory*. Oxford, UK: Oxford University Press. [伊藤嘉高訳 (2019) 『社会的なものを組み直す アクターネットワーク理論入門』法政大学出版局]
- Law, J. (2004). *After Method Mess in Social Science Research*. Oxon, UK: Routledge.
- Law, J. (2007). *Actor-Network Theory and Material Semiotics*. Retrieved May 21, 2021, from <http://heterogeneities.net/publications/Law2007ANTandMaterialSemiotics.pdf>.
- Michael, M. (2017). *Actor-Network Theory Traials, Trails and Translations*. London, UK: SAGE.
- 大野哲也 (2017) 「災害復興とツーリズム (1) — ネパールの世界遺産とアクターネットワーク理論」『桐蔭論叢』36, 139–147.
- Peters, P. (2012). Walking down the boulevard: On performing cultural tourism mobilities. In R. Duim & C. Ren & T. Jóhannesson (Eds.), *Actor-Network Theory and Tourism; Ordering, materiality and multiplicity* (pp. 94–110). Oxon, UK: Routledge.
- Simoni, V. (2012). Tourism materialities: Enacting cigars in touristic Cuba. In R. Duim & C. Ren & T. Jóhannesson (Eds.), *Actor-Network Theory and Tourism; Ordering, materiality and multiplicity* (pp. 59–79). Oxon, UK: Routledge.
- 鈴木鉄忠 (2020) 「「本物を見た!」—「真正性」と「観光のまなざし」の間の海外体験学習—」『共愛学園前橋国際大学論集』20, 177–198.

原一樹, アクターネットワーク理論を活用した観光研究に向けての準備的考察, *Ignis*, Vol. 1, 2021, pp. 81–100

高橋真央 (2020) 「学生が被災地から学んだものとは — アクターネットワーク理論から考える —」  
『甲南女子大学研究紀要 I』 56, 17–28.

Watson, G. (2007). *Actor Network Theory, After-ANT & Enactment: Implications for method*. Retrieved May 21, 2021, from [https://www.gavan.ca/wp-content/uploads/2007/01/ANT\\_comp.pdf](https://www.gavan.ca/wp-content/uploads/2007/01/ANT_comp.pdf)